

# 江戸川乱歩『人間椅子』論

～嫉妬と欲求の観点から～

2020年11月20日

3年8組 35番

森 勇輔

【優秀論文】

# 江戸川乱歩『人間椅子』論

～嫉妬と欲求の観点から～

3年8組35番 森 勇輔

## I はじめに

『人間椅子』は江戸川乱歩が1925年9月に大衆娯楽誌『苦楽』の特別号で発表した短編小説である。作者の江戸川乱歩は日本における本格探偵小説を確立したばかりではなく、「恐怖小説」とでも呼ぶべき芸術小説をも創り出した<sup>1</sup>。『人間椅子』は「差出人」が誰だったのか、本当に椅子の中には誰もいないのだろうか、どこまでが本当の話なのかについてはっきり書かれていない。先行研究では「差出人」が「佳子」の夫（以下、夫）ではないかという疑問が提起されている。

本稿では「差出人」が夫であるということが適切かどうか検証したうえで『人間椅子』を以下の手順で論考していきたい。第一に『人間椅子』の「差出人」についての疑問を示す(II)。次に「差出人」に嫉妬が生じているかを吟味する(III)。さらに「差出人」にどのような欲求が生じているかを判断し、「差出人」の犯行経緯を論じていく(IV)。最後に「差出人」についての疑問を解き、『人間椅子』を「恐怖小説」としてではない読みを提示したい(V)。

## II 「差出人」の嫉妬と欲求

この作品は「外務省書記官の夫の影をも薄く思わせるほど」有名になったある女性作家のもとに送られてきた「原稿」により繰り広げられる非現実のような話を具現化し、読者の恐怖を煽る話である。その「原稿」の「差出人」は自分を「お化けのような顔をした、その上ごく貧乏」<sup>2</sup>と低く評価している。そんな彼だが椅子作りにおいてはかなりの自信があり、自分で作った立派な椅子に座り妄想にふけることが唯一の「愉しみ」になっていた。妄想にふける中、自分が椅子の中に入ってしまうと、醜い自分を「人間世界から、消滅してしまう」という素晴らしい考えが思い浮かんだのである。最終的に彼の入った椅子は女性作家「佳子」のもとに行きつくのである。そんな「佳子」のもとに届いた「原稿」には次のような記述がある。

もし彼女が、私の椅子に生命を感じてくれたなら、ただの物質としてではなく、ひとつの生きものとして愛着を覚えてくれたなら、それだけでも、私は十分満足なのでございます。

「佳子」が「原稿」を読み終わったことを見計らったかのように1通の手紙（以下、「手紙」）が送られてきた。『人間椅子』はこの「手紙」の内容を最後にして話が終わり、「差出人」は「佳子」の作品を愛読している者で、「佳子」に「差出人」の創作を批評して

<sup>1</sup> 江戸川乱歩（1960）『江戸川乱歩傑作選』新潮社、裏表紙

<sup>2</sup> 前掲『江戸川乱歩傑作選』p. 257。以下作品からの引用は同書による。

もらうために送ったものということが書かれている。

しかし、この「差出人」は本当に女性作家「佳子」の作品を愛読しているだけのいわゆるファンなのだろうか。森岡卓司は「手紙の差出人は、実は佳子の夫ではないのか？」<sup>3</sup>という疑問から論を展開している。本文冒頭には「美しい閨秀作家としての彼女は、このごろでは、外務省書記官である夫君の影を薄く思わせるほども、有名になっていた」という記述がある。「差出人」は「佳子」が「有名」になることに対して嫉妬を生じさせていたと考えられる。さらにこの嫉妬より派生したのが、「生きものとして愛着を覚えてくれたなら、それだけでも、私は十分満足」というような欲求なのである。

本稿では森岡の「差出人」が夫であるという読みを嫉妬と欲求の観点から適切かどうか検証し、そのうえで「差出人」はなぜ「佳子」に「原稿」と「手紙」を送る必要があったのか、『人間椅子』をどのように読むことができるかについて考察していく。嫉妬の観点を W. G. パロットの論、欲求の観点を A. H. マズローの欲求階層説を基とする。

### Ⅲ 嫉妬の観点から捉える「差出人」

#### (1) 「差出人」の嫉妬

「差出人」は「佳子」が「有名」になることに対して嫉妬を生じさせているというのは「佳子」を「有名」たらしめているものに対して嫉妬しているということになる。では、「差出人」は本当に嫉妬しているのだろうか。中里浩明によると W. G. パロット (1991) は嫉妬について次のように述べている。

嫉妬は区別できる。一つは、疑惑に満ちた嫉妬 (suspicious jealousy) であり、これは、脅威が薄々感じられるとはいえ、性質が未だはっきりしない場合に生じる。惧れと不確実さを、優勢な反応とする。二つ、既成事実としての嫉妬 (fait accompli jealousy) であり、これは、脅威の事実が明瞭で、関係への影響もすでに知られている場合に生じる。<sup>4</sup>

また、中里は同論文内でこの2つの嫉妬による脅威の事実、主たる感情、症候群、対ライバル感情について表でまとめているが<sup>5</sup>、その表に脅威という項目を加え、【表1】に整理した。

【表1】疑惑に満ちた嫉妬と既成事実としての嫉妬

	脅威	脅威の事実	主たる感情	症候群	対ライバル感情
疑惑に満ちた嫉妬	ライバルによるパートナーとの③	薄々感じられるが、②明確とは言い	④心配や不安(喪失の恐れ)	パートナーの術策に過敏、パートナ	当惑、羨望、怒り、損傷、⑤警告

<sup>3</sup> 森岡卓司 (1999) 「差出人不明—江戸川乱歩「人間椅子」試論—」『日本文芸論考』第26号、東北大学文芸談話会、p. 58

<sup>4</sup> 中里浩明 (1991) 「嫉妬と羨望. W. G. Parrott の類型学をめぐって—嫉妬と羨望の心理学(1)—」『神戸女学院大学論集』第38巻第2号、神戸女学院大学研究所 p. 57

<sup>5</sup> 前掲「嫉妬と羨望. W. G. Parrott の類型学をめぐって—嫉妬と羨望の心理学(1)—」、p. 55

	関係の喪失を含む	切れない		一とライバルの関係を①空想	
既成事実としての嫉妬	ライバルによるパートナーとの関係の喪失を含む	明確で、関係への影響も既知	特定されない	悲哀、怒りや損傷、意気消沈や憂慮、心配、羨望	切望、罪悪感

※下線は筆者、以下同様

(2020. 8、中里の表を基に筆者作成)

前提として、嫉妬とは「パートナーとの重要な関係が、ライバルのせいで、喪失の脅威に曝されたとき、経験される感情」<sup>6</sup>である。要するに嫉妬が成り立つためには、嫉妬の当事者・当事者のパートナー・当事者のライバルが存在しなければならないということである。これらをふまえると、「閨秀作家としての彼女は、このごろでは、外務省書記官である夫君の影を薄く思わせるほども、有名になっていた」は、「このごろ」ある存在（傍点は筆者、以下同様）が「佳子」を「閨秀作家」として「有名」にしていると解釈することができる。

「差出人」はこのある存在をライバルとしている。「佳子」を「閨秀作家」として有名にさせているというある存在は「佳子」の「創作」である。

また、「佳子」は「夫と共用の書斎へ、とじこもり、「長い創作にとりかかっている」という記述がある。「差出人」は「佳子」が「創作」と書斎に閉じこもるという術策により「佳子」が「創作」にとられてしまう、もしくは今までの「佳子」との関係を「創作」のせいで喪失してしまうのではないかという不確かな惧れを抱くことで、いつしか「創作」を擬人化するようになったと考えられる。そんな「佳子」に対して、「差出人」は「原稿」に「ひとつの生きものとして愛着を覚えてくれたなら、それだけでも、私は十分満足」という欲求を込めながらもライバルに警告を行っている。

つまり、『人間椅子』において「原稿」とは「差出人」が勝手に擬人化したライバルである「創作」に「佳子」を奪われるかもしれないという①空想によって、②明確とは言えない③関係の喪失という脅威に対して④心配と不安を抱き、ライバルへの感情である⑤警告を形にしたものと考えられる。また、「差出人」は疑念に満ちた嫉妬を生じさせていると考えられる。

## (2) 「差出人」と夫の共通点による照合

(2) では嫉妬についてさらに考察し、「差出人」を夫と照らし合わせていく。まず「差出人」の性別についてである。「原稿」の冒頭に「奥様のほうでは、少しも御存じのない男」という記述があり男であると捉えるのが妥当であろう。また、「差出人」は自らを「気の弱い男」とも述べている。これをふまえて「差出人」が夫だったらどうだろうか。「差出人」と夫は性別の観点から重なる。富田隆は、男の嫉妬とは「自分の嫉妬心に気づいていないこ

<sup>6</sup> 5に同じ

とから起こる」<sup>7</sup>と述べている。これが『人間椅子』で嫉妬について触れられていない所以である。

次は「差出人」の地位についてだが、「差出人」は自分が「ごく貧乏」、「因果な生まれつき」の椅子職人と述べている。また、Ⅱ章でも述べたように唯一の「愉しみ」が自分で作った立派な椅子に座り妄想にふけることである。その妄想した世界の部屋には「人間椅子」に合った「有名な画家の油絵」や「偉大な宝石のようなシャンデリヤ」、「高価なジュウタン」、「目の醒めるような西洋草花」があると「原稿」内で述べている。時代的にも「貧乏」で「因果な生まれつき」の人間にしては具体的すぎる「贅沢な部屋」が窺える。さらに「シャンデリヤ」や「テーブル」、「ヒステリー」、「アームチェア」、「シガー」などの外来語が「原稿」に頻出している。現在の日本では横文字が当然のように使われているがこの作品が書かれた1925年、もしくはそれよりも前の人間にしては横文字に詳しすぎるのではないだろうか。当時の識字率について、斉藤泰雄の「壮丁教育程度調査の結果の時系列的な推移を示したもの」<sup>8</sup>は表2の通りである。

【表2】壮丁教育程度調査（1899年 - 1930年）に見る成年男子（20歳）の学力程度<sup>9</sup>

	高等小学校卒業	高等小学校卒業同等学力	尋常小学校卒業	尋常小学校卒業同等学力	少々読書算術ヲ為シ得ル者	読書算術ヲ知ラサル者
1899年	6.2	4.9	29.4	8.9	26.0	23.4
1900年	6.5	4.9	30.6	9.5	25.5	21.7
1905年	14.1	8.5	40.0	8.7	14.4	10.9
1910年	20.8	9.3	41.9	7.0	11.3	4.3
1915年	25.3	9.2	39.9	7.9	9.5	2.2
1920年	29.8	2.9	42.9	12.7	2.2	1.2
1925年	35.9	2.3	41.7	9.0	0.8	0.9
1930年	46.6	3.2	33.1	5.3	0.3	0.5

出典)「識字能力・識字率の歴史的推移——日本の経験」(2012)『国際教育協力論集』

1907年には小学校令が改正され、高等小学校の英語教育はかつてほどの熱気が無くなり、高等小学校の職業教育・完成教育の一環としての性格を大きく強めることになったのである。また、高等小学校における英語学習者数は明治末期で割合にして高等小学校児童総数の1割強ほどと考えられる<sup>10</sup>。『人間椅子』が発表された1925年もしくはそれよりも前の日本がこの作品に描かれていると考えたとき、これらのことから「差出人」が手紙に記述してい

<sup>7</sup> 富田隆 (2003)『なぜ、男は女より嫉妬深くなったのか』PHP 研究所、p. 19

<sup>8</sup> 斉藤泰雄 (2012)「識字能力・識字率の歴史的推移——日本の経験」『国際教育協力論集』第15巻第1号、広島大学教育開発国際協力研究センター、p. 55

<sup>9</sup> 1907年の小学校令の一部改正により、高等小学校は現在の中学校第1, 2学年にあたり、尋常小学校は明治維新から第二次世界大戦勃発前までに存在した義務教育の初等教育機関となる。また、少々読書算術ヲ為シ得ル者は機能的非識字者、読書算術ヲ知ラサル者は非識字者とする。

<sup>10</sup> 江利川春雄 (1993)「小学校における英語化教育の歴史 (4) —明治後半期におけるその諸相—」『日本英語教育史研究』第8巻、日本英語教育史学会、pp. 79-80

る「貧乏」という言葉は偽りであることがわかる。さらに、長文である「原稿」を書くだけの語彙力があることより「差出人」は質の高い教育を受けていた、もしくは多くの外国人と関わったことのある人間と考えられる。

では、「差出人」が自分を「貧乏」や「醜い」とけなしているのはなぜだろうか。水島広子は嫉妬について『『醜い感情』というイメージが強いので、なかなか人に打ち明けることもできません。嫉妬するような人だと思われたくないのです』<sup>11</sup>と述べている。自分の中にある嫉妬という「醜い」感情を人に打ち明けられないため、「醜い」感情を発生させる元凶である「佳子」に直接胸中を語ることで嫉妬を解消しようとしたのである。また、その「醜い」感情で生活していた日々を「原稿」に「醜い」というテーマで創作したと考えられる。「差出人」が自分を「貧乏」や「醜い」とけなしている表現が「原稿」に多く書かれているのはこれが所以である。

つまり、「差出人」は高貴な人間と考えられる。高貴な人間について、ジョゼフ・エプスタインは「一段上の平等に位置した者たちは、ほかの者たちを踏みにじることが可能な立場となる。しかも人はこの地位におかれると、どうも他者を踏みにじりたくなってしまふ」<sup>12</sup>と述べている。要するに、「差出人」は急に成り上がった者である「創作」を踏みにじり、「佳子」を奪還しようとしたということである。対して、夫は「外務省書記官」であり、国家試験を潜り抜けた国家公務員である。いわゆるエリートといわれ、高貴な人間と言えるだろう。「原稿」に自分を「貧乏」と述べていることより、「差出人」は「原稿」内で本当の自分を偽っていると考えられる。

最後に「差出人」の性格についてである。(2)冒頭でも述べたが、「差出人」は自分を「気の弱い男」と称している。「気の弱い男」は自分よりライバルのほうが魅力的だからという「合理化」した考えから目を背けるために話をすり替える<sup>13</sup>。しかし、前述のように「差出人」が「原稿」内で自分を偽っていると考えた場合、本当の「差出人」は気が強い、すなわち「差出人」を自信家と捉えたらどうだろうか。自信家はふとしたきっかけで自信を失うが、自分の中でそれを受け入れることができず、無意識下で「妻や恋人に愛想を尽かされてしまうのではないか」という不安が生じ「彼女は浮気しているのではないか」という妄想を抱いてしまう<sup>14</sup>。妄想を抱いていることより「差出人」を自信家と捉える方が妥当である。加えて、「外務省書記官」である夫はどんなことにも自信をもっていなければやっていられない職業である。以上のことから嫉妬の観点で「差出人」を考察したとき、「差出人」は夫に重なる。

#### IV 欲求の観点から捉える「差出人」

##### (1) 「差出人」の欲求

II章でも述べたように「差出人」は「佳子」に「生きものとして愛着を覚えて」もらいたいというような欲求を生じさせていると考える。では、その欲求とは具体的にどのようなものだろうか。正木大貴は A. H. マズロー (1987) の欲求階層説について次のように述べてい

<sup>11</sup> 水島広子 (2014) 『「ドロドロした嫉妬」がスーッと消える本』KKベストセラーズ、p. 14

<sup>12</sup> ジョゼフ・エプスタイン 屋代通子=訳 (2009) 『嫉妬の力で世界は動く』、築地書館、p. 117

<sup>13</sup> 富田前掲書、pp. 54 - 56

<sup>14</sup> 富田前掲書、pp. 55 - 58

る。

人間の基本的欲求を低次から高次までの5段階の階層に分けた。低次のものから「生理的欲求 (physiological need)」、「安全の欲求 (safety need)」、「所属と愛の欲求 (social need/love and belonging)」、「承認の欲求 (esteem)」、「自己実現の欲求 (self actualization)」である。これらの欲求は階層になっており、下位の欲求から順番に満たされるとというのが基本的な考え方である。<sup>15</sup>

要するに、下位の欲求が満たされるとその1つ上の欲求を満たそうとするということである。詳しくは後述するが、欲求階層説についてまとめると【表2】の通りである。

【表3】マズローの欲求階層説

順番	欲求	説明	
上位	⑤自己実現の欲求	究極的な目標である本当に自分が求めるような理想の状態、自分が何の躊躇もなく自分らしくいられる状態をめざす欲求	
↑	④承認の欲求	他者承認を求める 自分の周りにいる他者から認められたい、評価されたい、注目されたいと思うもの	自己承認を求める 「自分はこれでよい」と思えるような自分で自分を認めることができる自己尊重にあたるもの
↑	③所属と愛の欲求	ある集団や家族のなかに所属して、そのなかで愛情が感じられるつながりを持ちたいという欲求	
↑	②安全の欲求	心身が安定的であって健康な状態を保ちたい、そして経済的にも安定を求めるもの	
下位	①生理的欲求	人が生命を維持するために必要な根源的な欲求 例：食欲、睡眠欲、性欲など	

「承認欲求についての心理学的考察：現代の若者とSNSとの関連から」p. 27の本文を基に筆者まとめ

生理的欲求は人が生命を維持するために必要な根源的な欲求、安全の欲求は心身が安定的であって健康な状態を保ちたい、そして経済的にも安定を求めるものである<sup>16</sup>。

まずは生理的欲求についてだが、ここで先に「差出人」が「佳子」の屋敷に来るまでの話をしておこう。「差出人」は「丹精こめた美しい椅子」と「どこまでもついて行きたい」という「奇怪きわまる妄想」を実行するべく、一度完成させたその椅子を壊し、「食料さえあれば、その中に二日三日はいりつづけていても、決して不便を感じないようにしつらえ」、「もぐりこ」んだ。その後、「外人の経営している或るホテル」へ納められ、そこで「盗み

<sup>15</sup> 正木大貴 (2018) 「承認欲求についての心理学的考察：現代の若者とSNSとの関連から」『現代社会研究科論集』第12号、京都女子大学大学院現代社会研究科、p. 27

<sup>16</sup> 15に同じ

を働」き、「相当の額」を手にいれたことを述べている。同時に「人間椅子」に座る「異国」の女性たちと「肌のぬくみを感じるほども密着」することで「触覚と、聴覚と、そして僅かの嗅覚のみの恋」を感じ、「愛欲」に「夢中」になっていたと述べている。そんななか、「競売」にかけられ、最終的に夫が「人間椅子」を買い取るに至ったのである。これらのことより生理的欲求、安全の欲求は満たされていると考えられる。そのうえで生じるのが所属と愛の欲求である。

所属と愛の欲求は「ある集団や家族のなかに所属して、そのなかで愛情が感じられるつながりを持ちたいという欲求である」<sup>17</sup>。前述したが、「差出人」は「佳子」に「愛着を覚えて」もらいたい、「愛して」もらいたいと述べている。これは所属と愛の欲求の説明の后者は当てはまっているように考えられる。しかし、前者はどうだろうか。「差出人」は「佳子」とある集団を形成している、もしくは「差出人」が「佳子」を家族とみなしていなければならない。「差出人」は「佳子」を「私の恋人」として「恋をささげていた」と述べている。これを集団、家族と解釈してよいのかは難しい。この「差出人」が「佳子」を集団、家族とみなしているかについては（2）で詳しく述べていく。

しかし、もし「差出人」が「佳子」を家族とみなしていた場合、所属と愛の欲求が生じていたことがわかる。また、所属と愛の欲求が満たされていないことから、それよりも上位である承認の欲求と自己実現の欲求は生じていないことになる。しかし、承認の欲求が生じているともとれる記述が「手紙」にある。「手紙」には次のような内容がある。

私は日頃、先生のお作を愛読している者でございます。別封お送りいたしましたのは、私の拙い「創作」でございます。御一覧の上、御批評がいただけますれば、この上の幸いです。或る理由のために、原稿のほうは、この手紙を書きます前に投函いたしましたから、すでにごらんずみかと拝察いたします。如何でございましたでしょうか、もし拙作がいくらかでも、先生に感銘を与え得たとしますれば、こんなに嬉しいことはないのですが。

承認の欲求とは自分の周りにいる他者から認められたい、評価されたい、注目されたいと思う他者承認と「自分はこれでよい」と思えるような自分で自分を認めることができる自己尊重にあたる自己承認の2つの層が想定されている<sup>18</sup>。「手紙」では「差出人」が「佳子」に「原稿」の「批評」をお願いし、「佳子」に評価してもらおうとしている。これは他者承認を求めていると言えるだろう。

つまり「佳子」に自分を認めてもらうため、注目してもらうために「佳子」が認めていて、注目している「創作」に対して「差出人」は「原稿」という創作で対抗し、評価してもらおうと考えたのである。欲求階層説に則ると2つの欲求が同時に発生することは考えられないため、不自然と所属と愛の欲求は満たされ、「差出人」には承認の欲求が生じているということになる。2つの欲求が生じているのではないかという矛盾については（2）で詳しく述べていく。

---

<sup>17</sup> 15に同じ

<sup>18</sup> 15に同じ

## (2) 「差出人」の犯行経緯

(2) では嫉妬の観点から「差出人」を夫と重ね合わせ、さらには「差出人」の犯行経緯について考察していく。(1) より、「差出人」と夫と重なるためには夫が①生理的欲求を満たしていること、②安全の欲求を満たしていること、③所属と愛の欲求を満たしていること、④承認の欲求が生じていること、⑤承認の欲求が満たされていないため、自己実現の欲求が生じていないことなどの条件が挙げられる。便宜上、下位から2番目の安全の欲求について先に述べておく。「外務省書記官」である夫の健康問題の記述はなく、おそらく経済的な問題もないだろう。また、夫は嫉妬を生じさせているが、Ⅲ章よりその脅威は明確でないため、心配や不安の感情をもっていても心身の問題にまで発展はしていないだろう。むしろライバルに警告するほどの気持ちの余裕があるため、安全の欲求は満たされている。つまり最下位の生理的欲求も満たされていることがわかる。

所属と愛の欲求だが、まずは(1)で述べた「差出人」が「佳子」を集団、家族とみなしているかについてである。「差出人」が夫であったとき、夫は「佳子」を集団というより家族とみなしていて当然だろう。そのうえで妻からの愛情を受けたい、「差出人」の言葉にすれば「愛着を覚えて」もらいたいと思ってもなんらおかしいことはない。岡田尊司によると愛着のスタイルには思いやりがあり、優しく、よく気が回り、親切で、不安やストレスを感じにくい安定型と優しさや思いやりに欠け、過度に厳格だったり、相手の気持ちに無頓着だったり、不安やストレスを感じやすかったりする不安定型に分けられる。さらに不安定型には誰に対しても親密な愛着というものが築かれにくい回避型と過剰なまでに親密な関係を求めようとする不安型愛着スタイルに分けられる<sup>19</sup>。

夫は不安型愛着スタイル、「やさしい心遣い」のある「佳子」は安定型愛着スタイルが当てはまる。夫婦間の愛着について岡田は「二人の間の愛着スタイルのギャップは、平穏なときにはそれほど目立たないが、問題が起きると顕著になる」<sup>20</sup>と述べている。つまり夫は「佳子」が「創作」にとられてしまうのではないかという問題が発生したため、夫婦間の愛着スタイルのギャップを埋めるために「原稿」内で「愛着を覚えて」もらおうとしたのである。これは所属と愛の欲求が生じていると言える。

所属と愛の欲求が行動に現れたのが、「原稿」を書くということだと考えられる。欲求の観点からも「差出人」を夫と重ねることができよう。最後に「原稿」では所属と愛の欲求を満たそうとしているが「手紙」では承認の欲求を満たそうとしているという矛盾について論じていく。承認の欲求について太田肇は次のように述べている。

たいていの人自身は自分自身、認められたいという欲求をもっている。けれども、それが叶わないことがある。そして、自分にも相手に負けないくらいの素質や潜在能力が備わっていると思っているとき、相手に対して嫉妬する。つまり嫉妬を抱くのは、自分が相手と同じ資格があると思っているとき、相手に対して嫉妬する。あるいは努力すれば相手と同じところに手が届くと多少なりとも信じているときである。<sup>21</sup>

<sup>19</sup> 岡田尊司 (2016) 『夫婦という病』河出書房新社、pp. 21-22

<sup>20</sup> 岡田前掲書、p. 24

<sup>21</sup> 太田肇 (2007) 『承認欲求』東洋経済新報社、p. 41

なかでも「愛と信頼の関係にある相手（親和的他者）を対象として、『ありのままの私』が無条件に受け入れられている、という実感をともなう承認が『親和的承認』<sup>22</sup>である。夫は嫉妬しているため太田の論は当てはまり、努力すれば相手である「創作」と同じ資格がある、もしくは同じところに手が届くと信じていることになる。しかし、「親和的承認の獲得はかくも不確かなものであり、自分の努力次第で何とかなる、といったものではない」<sup>23</sup>のである。つまり、所属と愛の欲求は「原稿」で満たすことができたが、承認の欲求は夫自信の努力次第ではどうにもならないことであるため、「手紙」で直接「批評」を試みたのだと考えられる。

また、所属と愛の欲求が満たされたのは「原稿」を書いている最中、特に終盤だと考えられる。「原稿」の序盤、中盤では嫉妬している自分を「醜い」と思っている夫が嫉妬していた生活を基に「醜い」というテーマで創作したものであり、中盤には夫の「佳子」に対する恋についても述べている。そのうえで、終盤に「お逢いくださるわけにはまいらぬでございましょうか」という「佳子」に逢うための決意をしている。

夫は「原稿」という創作を作り上げることで「佳子」の「創作」と同じところに手が届くとともに自信をもち、嫉妬を解消、同時に所属と愛の欲求を満たしたのである。そこで生じたのが承認の欲求であり、実際に「佳子」と逢うことで欲求を満たそうとしたのである。しかし、「気味のわるい」ことと「佳子」に思われ、親和的承認を自分の努力ではどうにもならないだろうと考えていた夫は、あらかじめ「別封お送り」した「手紙」によって「原稿」が創作であることを白状し、「原稿」という創作の「批評」で承認の欲求を満たそうとしていたと考えられる。

## V 「恐怖小説」からの脱却

『人間椅子』に森岡の「手紙の差出人は、実は佳子の夫」<sup>24</sup>であるという読みは適切であると考えられる。そのうえで、「原稿」は夫が嫉妬を生じさせていることを「佳子」だけには知ってもらうため、所属と愛の欲求を満たすため、疑惑に満ちた嫉妬を解消するためである。また、「手紙」は夫が承認の欲求を満たすため、創作を書き上げるだけでなく「佳子」に実際に「批評」してもらうためである。では、これらのことから『人間椅子』をどのように読むことができるだろうか。前述したが夫は「人間世界から、消滅」しようと椅子に入ることを決意した。しかし、それは本当に自らを「消滅」させるためだけなのだろうか。

『人間椅子』は「手紙」の内容を最後に話が終わっており、「手紙」を読み終えた「佳子」の心境や様子が一切記述されていない。すなわち、この作品には2通りの結末があると考えられる。一つは「佳子」が夫を認めない、評価しない、注目しないという最低でもどれかが当てはまる結末である。もう一つは「佳子」が夫を認め、評価し注目するという結末である。

『人間椅子』に前者の結末が当てはまる時、夫は所属と愛の欲求を満たし、疑惑に満ちた嫉妬を解消するが、承認の欲求を満たすことができないという竜頭蛇尾がテーマの話と読むことができる。対して後者の結末が当てはまる時、順風満帆がテーマの話と読むことができる。III章より、夫は疑惑に満ちた嫉妬を解消することで心配や不安、怒りなどから解

<sup>22</sup> 山竹伸二 (2011) 『「認められたい」の正体』 講談社、p. 58

<sup>23</sup> 山竹前掲書、p. 65

<sup>24</sup> 3に同じ

放されたことがわかる。またIV章より、「手紙」は夫が承認の欲求、特に他者承認を求めて「佳子」に送ったものであり、満たされたと考えられる。では一方で自己承認に注目したらどうだろうか。この作品において夫には「佳子」に対して3つの存在がある。それは「佳子」の夫として、椅子として、「差出人」としての存在である。「佳子」の夫としては会話などによる「佳子」の声を捉える聴覚、「接吻」などによる「佳子」の味を捉える味覚、椅子としての夫は「佳子」の「理想的な肉体美」を捉える触覚、「佳子」の「豊かな薫り」を捉える嗅覚、「差出人」としての夫は「創作」に秘められた「佳子」の気持ちを捉える視覚で「佳子」を感じている。つまり、夫は五感を最大限に生かし「佳子」を感じることができていることがわかる。これは自己承認が満たされていると言えるだろう。本来、疑惑に満ちた嫉妬によって苦しめられていた夫にとって、嫉妬から解放され「佳子」を最大限に感じることができるようになることは、『自分はこれでよい』と思えるような自分で自分を認めることができる自己尊重にあたるもの<sup>25</sup>を手に入れたということである。そのうえで最後に生じるのが自己実現の欲求である。自己実現の欲求とは「究極的な目標である本当に自分が求めるような理想の状態、自分が何の躊躇もなく自分らしくいられる状態をめざす欲求」<sup>26</sup>であり、疑惑に満ちた嫉妬から解放され、「佳子」を感じることのできる理想の状態をも手に入れるという夫の求めていた自分になったのである。

『人間椅子』は「恐怖小説」を得意とする江戸川乱歩によって書かれた、という先入観で読まれがちである。この作品は結末をはっきりさせないことで読者に考えさせるところにおもしろさがある。本稿では嫉妬と欲求の観点から『人間椅子』を考察してきたが、竜頭蛇尾な話や順風満帆な話というように読みについても様々な考えに辿り着くができる。また、恐怖や嫉妬、欲求だけでなく他の観点からこの作品を考察しても様々な読みができるだろう。つまり、『人間椅子』を「恐怖小説」という先入観にとらわれず読むことができたとき、その先には「恐怖小説」というよりもさらにおもしろい読みができるのではないだろうか。

(10902文字 原稿用紙27.3枚相当)

---

<sup>25</sup> 15に同じ

<sup>26</sup> 15に同じ

【参考文献及び関連 URL】

- ◆江戸川乱歩（1960）『江戸川乱歩傑作選』新潮社
- ◆太田肇（2007）『承認欲求』東洋経済新報社
- ◆岡田尊司（2016）『夫婦という病』河出書房新社
- ◆ジョゼフ・エプスタイン 屋代通子＝訳（2009）『嫉妬の力で世界は動く』、築地書館
- ◆富田隆（2003）『なぜ、男は女より嫉妬深くなったのか』PHP 研究所
- ◆水島広子（2014）『「ドロドロした嫉妬」がスーッと消える本』KK ベストセラーズ
- ◆山竹伸二（2011）『「認められたい」の正体』講談社
- ◆江利川春雄（1993）「小学校における英語化教育の歴史（4）—明治後半期におけるその諸相—」『日本英語教育史研究』第 8 巻、日本英語教育史学会
- ◆斉藤泰雄（2012）「識字能力・識字率の歴史的推移——日本の経験」『国際教育協力論集』第 15 巻第 1 号、広島大学教育開発国際協力研究センター
- ◆中里浩明（1991）「嫉妬と羨望. W. G. Parrott の類型学をめぐって—嫉妬と羨望の心理学(1)—」『神戸女学院大学論集』第 38 巻第 2 号、神戸女学院大学研究所
- ◆正木大貴（2018）「承認欲求についての心理学的考察：現代の若者と SNS との関連から」『現代社会研究科論集』第 12 号、京都女子大学大学院現代社会研究科
- ◆森岡卓司（1999）「差出人不明—江戸川乱歩「人間椅子」試論」『日本文芸論考』第 26 号、東北大学文芸談話会